

1. 先行研究と本研究の概要

光源氏の栄華や政権を担当することなどが語られる際、帰京後の光源氏をどう捉えるかといったことや、その人物造型に着目して考察されているものが多い。

・『**滯標**』巻で作者が光源氏を策謀家に変貌せしめている。
・光源氏は、現実的な人間像とか一つの人格とかいったところをやすやすと越え出てしまう存在としてあった。

しかし、光源氏帰京前の巻に着目すると、光源氏が政権を担当するという展開に至るには、桐壺院の遺言やそれを受けた朱雀帝の動きが深く関連しているように見受けられる。
物語上、恋愛から政治の話へと変貌するとされ、光源氏の栄華への第一歩目でもあるといえる「滯標」巻において、その冒頭、光源氏が政権を担当するというストーリー展開は、そもそもどのようにして成立していたのかを主に帰京前の状況、遺言に焦点をあてて検討する。

2. 平安以前の遺言

『日本書紀』

天武天皇が「天下のことは大小を問はず、全て皇后及び皇太子に報告せよ」との勅命を下す。→天皇崩御後、持統天皇・草壁皇子が政務を執り、世の中を治めた。

『日本書紀』

聖武天皇が「道祖王を孝謙天皇の皇太子に立てることを遺詔。藤原仲麻呂にこれを承知するか尋ね、勅命を破れば災いを被り、その身を滅ぼすとし、遺詔の遵守を誓約させ、仲麻呂もこれを承諾。→天皇崩御後、道祖王が立太子するも、素行の乱れを理由に皇太子を廃され、その後、獄死。**(聖武天皇の遺詔が破られる。)**→聖武天皇の警告どおり、遺言を反故にした仲麻呂は、称徳天皇によって一族もろとも滅ぼされる。

遺言のとおり世の中が治まっていることもあれば、反故にして混乱が生じることもあった。

3. 桐壺院の遺言と『源氏物語』における遺言

桐壺院からの遺言

・桐壺院→**朱雀帝** 春宮のことを頼み、重ねて、大事も小事も光源氏を相談相手とするように言い遣す。
・桐壺院→**光源氏** 朝廷に仕えるための心構えを話し、さらに、春宮の後見をするように言い遣す。
→どちらの遺言も春宮が帝位につき、光源氏が朝廷と春宮の後見になるように言い遣されている。

桐壺院の遺言をうけて…

朱雀帝: 遺言に忠実であろうとするが、弘徽殿太后、右大臣の存在があることで、遵守できず、思い悩む。
光源氏: 春宮のことを思い、自ら須磨へ退去することを決意し、遺言を遵守。
→なぜ、この状態から朱雀帝が遺言を遵守し、光源氏が政権を担当するという展開が成立するに至ったのか？

光源氏が都に戻れたのはなぜ？

夢に桐壺院が現れ、目を合わせた際、朱雀帝が**目を患い**、心細くなり、光源氏を都に召還。

目を患うことの意味

『権記』、『小右記』によると、平安時代の貴族は目を患ったとき「**祟**」を意識している。

光源氏が「滯標」巻で政権を担当できた背景には、桐壺院が遺言を残し、それに背いた状態にある朱雀帝の夢に出現し、さらには、「**祟**」として眼病をもたらしたことがあった。

桐壺院の遺言と共通点を持つ他の遺言について

・**光源氏への遺言**: 六条御息所、藤壺宮、朱雀帝が遺言を託す。
→いかなる身分・関係性の人から、また、いかなる内容の遺言も遵守されている。
・**親から子への遺言**: 少貳→**少貳の男子**、明石の入道→**明石の御方**、明石の御方→**明石の女御**、八の宮→**大君・中の君**、常陸宮→**末摘花**
→八の宮から中の君への遺言以外は全て遵守される。また、中の君は、遺言に背いてはいるものの、遺言の存在を気にしている。

これらの遺言と共通点を持つ桐壺院の遺言も物語上、遵守されてしかるべきものとして扱われていたと推測できる。

4. 遺言に対する普遍的価値観



例えば…

・常陸宮からの遺言を遵守し、家や調度品を譲らずにいた末摘花は、その甲斐あって光源氏に見つけ出され、二条東院に引き取られ、晩年に至るまで温かな庇護のもと過ごす。(幸福)

・八の宮からの遺言を反故にしていた中の君は、その後、二条院に引き取られ、匂宮との子を妊娠し、「幸ひ人」路線を進んでいるかのように見える。(幸福を獲得?) しかし、内実はそうではない。

- (1) 結婚直後、中の君は匂宮の夜離れに苦悩。
- (2) (1)を見た姉大君はその心労から重病に陥り、死亡。(宇治での生活の寂しさは中の君を悲しみの底へと陥れる。)
- (3) 二条院に引き取られた後、匂宮と夕霧の六の君との結婚が実現し、匂宮は六の君の魅力に惹かれ、再び、中の君のもとから足が遠のくようになる。(幸福を獲得→不幸)

『宇津保物語』でも…

・俊蔭の遺言を遵守した俊蔭の女が幸福を獲得。
・忠こそ母君の遺言を反故にした千蔭に不幸がもたらされる。

5. 朱雀帝のキャラクター設定

心が優しすぎて毅然としたところがないという朱雀帝のキャラクター設定も光源氏が都に戻るためには重要。

(遺言に背いたことで故人が夢に現れ、目を患ったとしても、朱雀帝が弘徽殿太后のように勝気な性格であれば、心細く思い光源氏を召還するとは考え難い。)

→遺言が効果的に物語に作用するようなキャラクター設定がなされている。

まとめ!

『滯標』巻で光源氏が政権を担当するというストーリー展開は、平安以前から続く遺言への普遍的価値観を前提に物語が作成されているのはもちろんのこと、遺言が効果的に物語に作用するように朱雀帝のキャラクター設定などが綿密にほどこされた上に成立していたものであった。

→今後、光源氏の栄華を語るにおいても、帰京後の光源氏や光源氏の人物造型ばかりに目を向けるのでは不十分で、帰京前にも焦点をあて、遺言を残した桐壺院、それを受ける朱雀帝など、光源氏以外の人物にも目を向けることが必要である。